

軽種馬の生産構造

—— 歴史的・地帯的特徴について ——

教授 山根 勝次

はしがき

「1兆円産業」にまで驚異的な成長をとげた競馬の発展をささえる背景には、つねにフレッシュでダイナミックな軽種馬（競走馬）が毎年、補充されることが前提である。

軽種馬生産は、家畜の腹をととしての生産であるため、繁殖牝馬の飼養形態が問題となる。そこに牧場規模が規定されてくる。また繁殖牝馬は高価なため、資金的に購入することができない関係から、「仔分け生産方式」形態が発生し、生産構造は複雑となっている。また優秀な産駒を生産するためには、優秀な種牡馬の種付が絶対的な要件である。したがって種牡馬も、生産構造では主要な地位を占める。

生産にまつわる種々なる問題があるが、軽種馬生産構造を歴史的、地帯的、階層的な観点から分析検討することによって、その課題が明確に把握されるのである。

ここでは特に、1兆円産業に成長した競馬の背景について軽種馬生産の観点からその成長の足跡をたどりつつ実態を把握し、その特徴点を見出そうとするものである。また軽種馬生産は地帯的特徴をもつものであるから、その地帯性を明確に示しておくことも生産構造を分析検討する場合重要である。拙論では特に歴史的、地帯的特徴について若干分析検討を加えることとし、階層的観点からの分析検討は後日の機会に譲ることとする。

種馬生産の歴史的・地帯的特徴

戦後の馬の激減傾向とは対照的に軽種馬生産は激増傾向を示している。戦後の馬の激減過程は、軍馬需要の潰滅のほか農耕馬の飼養の変化によるものである。すなわち、耕畜、糞畜、搬畜の機能が、機械器具、化学肥料、自動車輸送によって代位されていく過程であるとみられる。しかし軽種馬生産は軍馬、農耕馬の激減傾向とは逆に漸増傾向を示している。軽種馬生産の動向を左右するものは「競馬」の消長である。

競馬は戦時下19年に中断されたが、21年東京、京都で戦後第1回の競馬が開催された。以降、競馬法施行規則の改正による中央競馬、地方競馬などの改編が行なわれるとともに、29年には中央競馬が制定され、従来の国営競馬は「中央競馬」として継承されてその発展の基礎が確立し、以降、競馬の異常な発展へと加速を加えていくことになる。

発展過程を計数的に年次別にみると、25年では中央競馬の勝馬投票券売得金額は35億円余

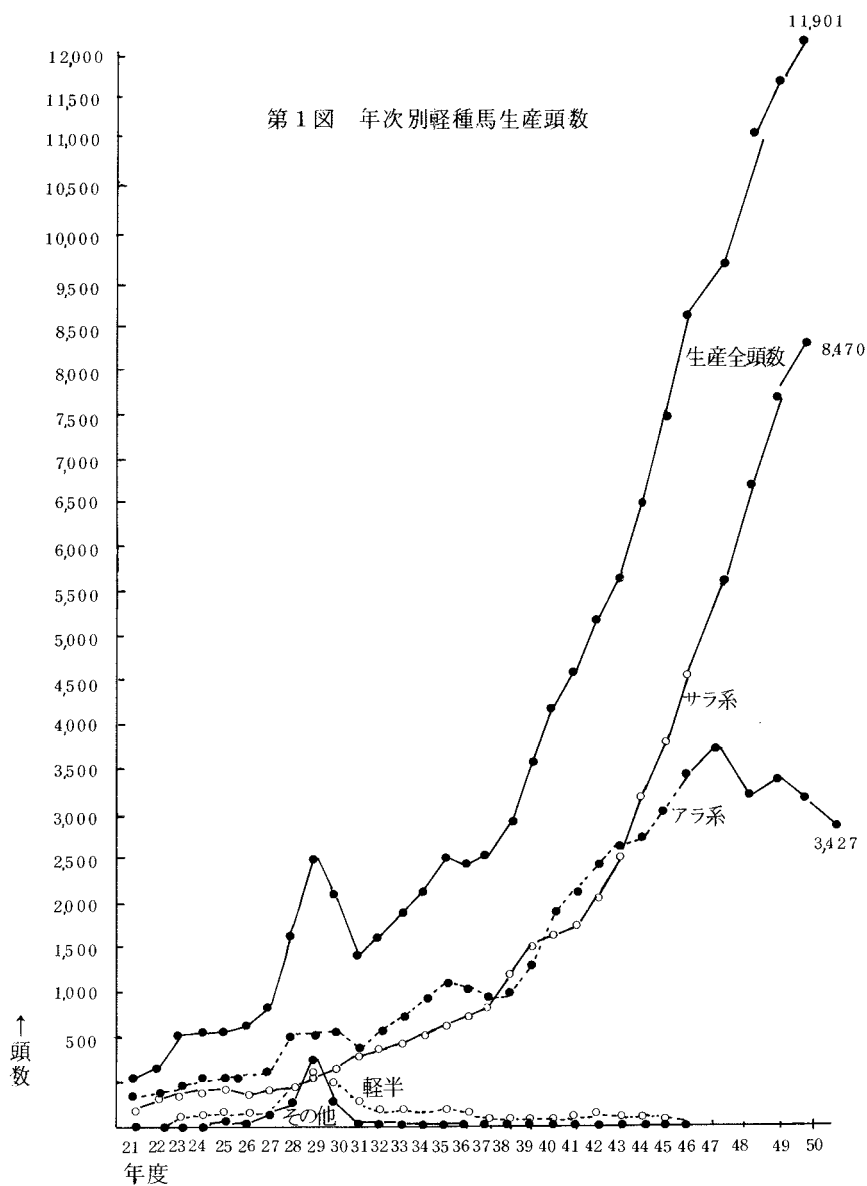
（開催日数160日、入場者128万人）であったが、35年では、勝馬投票券売得金額は290億円余（開催日数215日、入場者224万人）と漸増しているが、45年度では勝馬投票券売得金額は4,069億円余（開催日数286日、入場者1,223万人）となり、52年度をみると勝馬投票券売得金額は10,992億円（開催日数288日、入場者1,311万人）となり、1兆円の大台を突破するという異常な進展を示している。地方競馬も中央競馬と同様にその発展を示している。25年度では売得金70億余（開催日数2,058日、入場者412万人）であったが、35年度では売得金317億円余（開催日数2,034日入場者562万人）と漸増している。45年度では売得金3,078億円余（開催日数2,176日、入場者2,053万人）となり、52年度では売得金7,263億円（開催日数2,348日、入場者2,287万人）と驚異的な発展を示している。

中央競馬、地方競馬をとおして売得金は、52年度で18,255億円、入場者数3,598万人という異常な発展過程をたどっている。このような競馬の異常な発展に対応して、軽種馬の生産もまた激増している。

具体的に軽種馬生産頭数を年次別に第1図第1表でみてみよう。競馬の一時停止によって種の保存のみにとどまった軽種馬の生産も、昭和21年競馬の再開とともに29年までには飛躍的に増加してきたが、30年になると種付頭数が激減し、さらに31年には生産頭数はいちじるしく減少した。その原因は競馬自粛にともなう価格の低落によるものと考えられる。つまり、軽種馬の需給関係の変化としてとらえられる。競馬に出走する馬の質的变化が30年代にあらわれたのである。すなわち、サラブレッドには大きな変化はみられず、傾向としては漸増を示しているが、アラブ系と軽半血種およびその他の中間種が減少している。

戦後軽種馬生産は利益が多いとされ、牝馬の資質の検討もすることなく軽種馬生産に転向した農家が多かったが、30年代になってサラブレッドへ需要が傾き、アラブ系軽種馬の供給過剰になって価格が低落し、その結果、軽種馬生産からの脱落となってあらわれてくる。とくに軽半血種および中間種の生産は、31年以降漸増することなく漸減傾向を示している。30年後半は、高度経済成長とともに競馬の着実な発展によって、軽種馬生産も資力と経験を有する生産農家の間に安定し、毎年上昇傾向を示してきたが、ついに43年以降、過剰生産でないと識者の間で危機がさげられるようになった。しかし、軽種馬生産は50年度では約11,901頭という数字を示すに至った。

第1図で理解できるようにサラ系は40年以降高度経済成長に伴い着実に生産はのび、50年度では8,470頭となっている。それに対比してアラ系は47年以降漸減傾向を示している。これは競馬番組編成などの諸条件に基因しているものと思われるが、生産者の間にも量的生産から



(注) 軽種馬生産統計より作成

質的生产へと、その対応がみられる。

52年度では生産過剰にともなう生産調整が実施されるに至った。すなわち軽種馬協会日高支部では競走馬の安定的供給体制の整備事業として「特別資金融資協議会」を設置し、約1千頭を融資対象馬に選定し、生産調整を実施している。融資内容は繁殖廃用馬1頭につき200万円、

償還は2年据え置き5年元金均等償還、利子は年5%という内容のものである。但しこの生産調整は全国的なものではなく日高地方のみである。生産調整の割合は約8%である。

軽種馬生産の地帯的特徴

軽種馬の生産地帯は限定されている。すなわち、北海道日高、胆振地方、東北地方（青森、岩手、宮城、福島）、関東地方（千葉、栃木）、九州地方（宮崎、熊本、鹿児島）である。

戦前の軽種馬の産地としては岩手の「小岩井農場」、千葉の「宮内省下総御料牧場」を中心に分布していた。岩手県の「小岩井農場」は大々的にサラブレッドの生産を行ない、その影響によってその地区の農家で軽種馬生産が行なわれていたが、戦後小岩井農場の業務内容が変わったことから、この地区の生産は衰退してきている。

また千葉県下の軽種馬生産は、戦前は「宮内省下総御料牧場」の周辺を中心に発達した。これは御料牧場で飼育していた種牡馬を提供してもらったことによって発達した。しかし戦後御料牧場では軽種馬の生産を一時中止したので、その地区の生産の衰退はいちじるしかった。

戦後とくに注目されてきた生産地帯は、北海道日高、胆振地方である。この地方は軽種馬生産の自然的な適地であるといわれているとともに、経済的な適地などともいわれている。馬産地の成立要件は、一般的に、他の農産物の限界収益地あるいはこれに近いところに分布するといわれているところからみて、この地方は馬産地として経済的適地としての要件を備えていたとも考え

第1表 種牡馬、種付牝馬、産駒頭数の変遷

（単位頭）

区 分 年 次	種 牡 馬			種 付 牝 馬					産 駒				
	総 数	サラ 系	アラ 系	総 数	サラ 系	アラ 系	軽 半	その 中 間 他 の	総 数	サラ 系	アラ 系	軽 半	その 中 間 他 の
2 0	104	59	45	1157	527	606	24	—	541	221	319	1	—
2 5	105	69	36	2493	743	999	308	443	1192	341	556	152	143
3 0	197	128	69	4510	1287	1740	718	765	1954	727	899	252	76
3 5	226	141	85	4783	2090	2274	275	144	2934	1237	1560	120	17
4 0	290	184	106	7914	4040	3560	229	85	5101	2260	2731	106	4
4 5	446	277	169	13695	8059	5390	199	47	9089	5065	3943	78	3
5 0	685	461	224	19048	14349	4672	18	9	11901	8470	3427	1	3
5 1	701	483	218	18266	14142	4111	6	7					

注）軽種馬生産統計より作成

られる。日高、胆振地方が馬産地として注目されるようになったのは、戦前の生産の中心であった小岩井農場、下総御料牧場の軽種馬生産業務の停止が直接の原因ではあるが、さきにみた馬産地としての自然的、経済的適地であったこともその要因となっている。なお国立日高種畜牧場があり、地元軽種馬の改良事業に直接貢献していたこと、さらに戦前の軽種馬生産の主体をなした小岩井農場の優秀馬が日高地方に移されたという事情などがからみ合い、戦後の日高地方の発展ぶりはめざましく、不動の地位を確立するにいたったのである。

青森県下の軽種馬生産は、県下でも八戸、十和田、三沢の三市と、三戸、上北の両郡に分散している。これらの地域は江戸時代の南部藩領に属し、古くから「南部駒」の中心的な生産地であった。明治以降敗戦までは、わが国の馬産地の中心であり、とくに軍馬生産地であった。青森県下の軽種馬生産にも多分にこの伝統が流れている。農業を主業とした零細な軽種馬生産者が多いのもそのためである。

鹿児島県下の軽種馬生産は、響於、肝付、姶娘、川辺、熊毛の各郡の一部に分散している。この地方は火山灰土の乾燥地帯であるので、馬産地帯としては適地である。かつては鹿児島の馬は名馬として名声をはせ、古い伝統をもっている。明治以降敗戦まで馬の増殖改良につとめ、とくに乗型馬の生産から鞍型馬の生産に切りかえ、中間種牡馬をもって改良をはかった。戦後は農耕馬の生産が中心であったが、農業の機械化あるいは肉畜としての価値の低さから全面的に軽種馬生産へと転換し、生育の早い九州産馬としての名声を細々ながら保持しているのが現状である。鹿児島の軽種馬の生産者は農業を主業として行なわっているため、全国的にみて最も零細な規模の生産者で占められているのが特徴である。

軽種馬の地帯分布を、具体的に3つの指標によって確認してみよう。

第1に軽種馬生産者地帯的分布状況を見ると第2表の如く、生産者数3,318戸のうち北海道日高地方が最も多く1,871戸で全体の56.4%であり、次いで青森地方の369戸で全体の11.1%であり、第3位に鹿児島の207戸で全体の6.2%となっている。第4位は北海道胆振地方の171戸で全体の5.2%となっている。第5位は宮崎の136戸で全体の4.1%となっている。この地帯分布をみるかぎり、北海道日高、胆振地方、青森地方、鹿児島、宮崎地方に限定されていることが確認される。

第2に種牡馬、繁殖牝馬の地帯的分布状況を見ると第3表の如く、種牡馬は50年度末で685頭であり、このうち日高地方が390頭で全体の57%を占め第1位であり、第2位は胆振地方の68頭で全体の10%を占め、第3位は青森地方の66頭で全体の9.6%であり、第4位は鹿児島、十勝地方の34頭で全体の5%を占めている。種牡馬の分布状況からも北海道、青森、鹿児島地方に馬産地が集中していることが理解できる。種牡馬との関連性において繁殖牝馬の分布

第2表 軽種馬生産者地帯別分布状況

昭和51年末現在

区 分												その他	合計
	日 高	胆 振	十 勝	青 森	岩 手	宮 城	福 島	栃 群 馬	埼 玉	千 葉	宮 崎	鹿 児 島	
現在数	1871	171	99	369	41	110	118	44	89	136	207	63	3318
百分率%	56.4	5.2	3.0	11.1	1.2	3.3	3.6	1.3	2.7	4.1	6.2	1.9	100

(注) 軽種馬生産統計より作成

第3表 種牡馬、繁殖牝馬地帯別分布状況

(昭和50年度)

地 帯 項 目		総 数	日 高	胆 振	十 勝	青 森	岩 手	宮 城	福 島	栃 木	埼 玉	千 葉	宮 崎	鹿 児 島	そ の 他
種牡馬	実数	685	390	68	34	66	3	12	14	8	1	24	11	34	20
	比率	100	56.9	9.9	5.0	9.6	0.4	1.8	2.0	1.2	0.1	3.5	1.6	5.0	2.9
繁殖牝馬	実数	19040	13200	1449	414	1407	33	186	246	127	5	580	373	870	158
	比率	100	69.3	7.6	2.2	7.4	0.2	1.0	1.3	0.7	-	3.0	2.0	4.6	0.8

(注) 軽種馬生産統計より作成

第4表 地帯別生産頭数

(51年度)

地 帯 区 分		総 数	日 高	胆 振	十 勝	青 森	岩 手	宮 城	福 島	栃 木	埼 玉	千 葉	宮 崎	鹿 児 島	そ の 他
生産頭数		11901	8447	850	227	842	21	82	127	70	2	363	209	566	95
百分率%		100	71.0	7.1	1.9	7.1	0.2	0.7	1.1	0.6	0.0	3.0	1.8	4.8	0.8
サラ系	実数	8470	6108	689	118	688	10	25	65	65	2	353	75	225	27
	比率	100	72.1	8.1	1.4	8.1	0.1	0.3	0.8	0.8	-	4.2	0.9	2.7	0.3
アラ系	実数	3427	2339	141	105	154	11	57	62	5	-	1.0	1.34	3.41	6.8
	比率	100	68.3	4.1	3.1	4.5	0.3	1.7	1.8	0.1	-	0.3	3.9	10.0	2.0
軽その 半他	実数	4	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	比率	100	-	-	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

(注) 軽種馬生産統計より作成

もほぼ同じ傾向を示している。すなわち、繁殖牝馬19,040頭のうち日高地方に13,200頭が集中し、全体の約70%を飼育していることになる。第2位は胆振地方の1,449頭で全体の7.6%を占め、第3位は青森地方の1,407頭で全体の7.4%を占め、第4位は鹿児島地方の870頭で全体の4.6%を占め、第5位に千葉が登上してくる。飼育頭数は580頭で全体の3%となっている。

第3に生産頭数について地帯別にサラ系、アラ系に区分してみると第4表の如く、サラ系では生産頭数8,470頭のうち日高地方で6,108頭で全体の72%を占め第1位であり、第2位は胆振、青森地方で689頭で全体の8%を占めている。第4位が千葉の353頭で全体の4%を占めている。北海道日高、胆振、青森、千葉地方はサラブレッドの生産ウエートが高い。

アラ系についてみると生産頭数は3,427頭で日高地方で2,339頭で全体の68%であり、第2位は鹿児島地方の341頭で全体の10%となっており、第3位が青森地方の154頭で4.5%となっている。第4位は胆振地方の141頭で全体の4.1%となっている。第5位が宮崎の134頭の3.9%となっている。アラ系の生産の特徴は鹿児島、宮崎など九州馬産地をあげなければならない。

以上の3つの指標によって北海道日高地方が全国第1位の馬産地であることが確認される。第2位は総体的にみて北海道胆振地方、第3位が青森地方であるという傾向がみられるが、第4位は南端、鹿児島、宮崎地方であると確認される。何れにしても、わが国の馬産地は、南北両端に集中していることが理解し確認できる。

むすび

軽種馬生産の歴史的、地帯的特徴の概観を述べてきたが、階層的特徴が加味されない限り体系的な生産構造を抽出することはできない。ここで述べた歴史的、地帯的特徴について要約しておこう。

まづ第1に軽種馬生産の背景は競馬そのものであり、競馬の消長が生産を規制することになる。競馬の驚異的な発展に伴い、生産も急増したことは年次別生産頭数によって把握される。軽種馬生産は量的には過剰傾向を示し生産調整が実施されたものの、質的には種々なる課題を提起している。すなわち、優秀な繁殖牝馬の確保と、優秀な種牡馬の導入、育成方法の充実強化などの問題が内在している。第2に、軽種馬生産の地帯的特徴は南北両端に生産地帯が限定されていることである。すなわち、北海道日高、胆振地方、青森南部地方、鹿児島、宮崎地方であるが、生産の中心は北海道日高地方である。